



シリーズ
探訪・探究
第八回

訪れたいまち

鹿児島県奄美大島



江戸の昔から高級品として珍重されていた「大島紬」。しかし、和服を着る習慣の衰退などにより、産地、奄美大島に以前の活気はなくなっている。産業として成り立たなくなってしまうのではないかと危機感から、なんとか「大島紬」をメインに島興しができないか、模索が始まった。

今回は、「新大島紬プロジェクト」と銘打って地元有志が実現委員会を立ち上げ再起をかける、奄美大島を訪れてみました。

羽田を飛び立つこと2時間半余り、奄美大島空港に到着。新幹線で言うところと京都あたりか？意外と近い。まず、新大島紬プロジェクト実現委員会委員長の越間晴氏に話を聞くために、越間氏が取締役を務める大島紬生産工場観光公園「大島紬村」を訪ねた。

「きゃしかすらんばい canyon」

「伝統工芸の基本は守りながら」

村内施設では大島紬ができるまでの工程を見学できる。まず驚くのは、その工程の多さ。作業はすべて分業で、反物になるまで40工程(細分化すると400〜500工程にもなる)を経てやっと仕上がる。見学した人が「知らなければ良かった。」

しかし、越間さんは、「このままでは伝統工芸品としては残るだろうが、産業としては衰退してしまう」。それでもいいのだろうか、と考えたとき、
「きゃしかすらんばい canyon(どうにかしなければいけない)」と強く思ったと言う。

そんな時、国土交通省の進めている「離島の活力再生支援事業」を知った。地元住民が自らの創意工夫で活性化を図る案を出し、離島社会の維持・再生をするというもの。

国の支援事業であるとはいえ、本

当に地域をなんとかしたいという熱い思いがないとプロジェクトは成功しない。

大島紬の一番の特徴は、「先染め」。細い絹糸を先に染め、その糸を縦横に交差させてその細かい緋(点)で柄を作っていく手法。軽くて暖かくシワになりにくいうえに、しなやかで身体になじみやすいため着くずれにくい。ゆえに、動きやすい。見た目は光沢があつて美しい。加えて丈夫。表裏があるので仕立て直したりして親子三代着られる。

知れば知るほど着てみたくなる。

「大島紬はとても良い物なので、みんなにお勧めしたい。受け手のニーズはどこにあるのか。安くして気軽に

着てもらえるようなものかを考えるとか、柄を今風にするとか、着ていける場の提供をするとか、興味を持ってもらう努力をするのも産地の仕事だと思います。伝統工芸の基本は守りながら、新しいなにかを考えなければ産業として続けていけない。作り手の意識改革も必要です。商品開発と基盤となる技術開発を進めながら、顧客を確保して販路を広げるためにはどうすればいいか。本場奄美大島紬協同組合、群島内市町村などとの連携も不可欠です。さまざまな意見を集約して、どうしたら来なくなる、どうしたら着なくなるを探っています」。

プロジェクトは始まったばかり。実は、委員長である越間さんは43才。委員会の中で最年少だ。若い人の発想と、最年少者を委員長に据える年長者の頭の柔らかさがある限り、このプロジェクトの先は明るいと確信した。

まずはカテゴリーを外すこと

高級品であるにもかかわらず、紬は正式な場には着ていけないというジレンマがあります。まずはカテゴリーを外すこと。大島紬で“お茶会”“成人式”“お色直し”など、着てもらうための提案もしていくつもりです。苦労はあるが、考えることは楽しい、と越間さん。



島時間を楽しんで

奄美大島観光協会事務局長の西條和久氏は語る。「発想の転換も必要。奄美はもともと琉球圏。沖縄を拠点にして島に来てもらう、という考え方もできます。また、港を整備したことにより、豪華客船「飛鳥II」など、年間10隻程度の客船が寄港するようになりました。観光に携わる若手が増えてきていることも明るい兆しです。島には絶品グルメの「鶏飯」はじめ珍しい物がいっぱいあります。ぜひ、島時間を満喫しに来てほしいです」。



とても楽しい

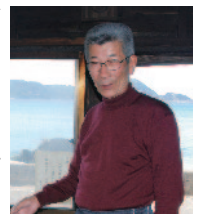
大島紬織工の田村り子さんは北海道出身。大島紬に魅せられ、島に嫁いで約40年。当時、織工の技術は門外不出。その技術を教えるかどうかで家族会議が開かれたという。今は、好きな仕事ができる喜びで毎日がとても楽しい。若い人にもぜひこの充実感を味わってほしいと思っている。



渋い着物は若い人にもよく映える。島の成人式では、地域によっては9割の新成人が大島紬を着る。

ふるさと奄美で老いを楽しむ

島では、ちょうど「あまみシマ博覧会」が開催されており、そのひとつ“塩づくり体験”を覗いてみた。島外で教師をしていた和田昭穂さんは、30年ぶりに故郷に戻ってみると浜は流木やゴミでいっぱい。何かに使えないかと考えたとき、昔



やっていた「塩づくり」で故郷に貢献したいと思った。体験を通じて「人づくり」ができればと地元小学生などを一年中受け入れている。

年中夢求

反物の販売と併せて洋服に合うようなデザインや小物を作っている。まずは小物から、最終的には本物の大島紬の着物を着てみたくなるようになってくれれば。西京子(あつこ)さんの思いは店頭に掲げられた「年中夢求」に、ぎゅっと詰まっていた。



「離島の活力再生支援事業」とは

国土交通省が離島地域の活性化を図ることを目的とし実施している事業。離島地域自らの創意工夫で、離島社会の維持再生を図る取組を支援する仕組み。「新大島紬プロジェクト」は多数の応募から選ばれた22年度の5件のうちのひとつ。



技術の裏付けがあることはもちろん、南国という土地柄か、越間さんはじめ今回お話を伺ったみなさんに、危機感はあるが悲壮感はなかった。高価な大島紬も地元で買えば割安で手に入ることもわかった。次は、観光客として島時間にどっぷりと浸かりたい、と思いつながり帰りの飛行機に乗り込んだ。



上京しての「市場調査」も欠かせない。

奄美市 <http://www.city.amami.lg.jp/>
 龍郷町 <http://www.town.tatsugo.lg.jp/>
 奄美群島広域事務組合 <http://www.amami.or.jp/kouiki/>